

日常生活史——H夫妻の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける
労働者の日常生活」（その八）

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、『人文研究』第91・97・98・99・101・103・105輯に続く、「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第91輯を参照されたい。

今回利用した資料は、1980年1月22日15時より19時30分まで、H夫妻のブラウンシュヴァイクの自宅でインタビューした内容を、A4タイプ用紙116ページに書き起こしたものである。インタビューは、H夫人と始めたところへ、途中からH氏が加わったのだが、彼は非常に熱心に話に加わった。本稿では、H夫人とH氏の証言を各々、分けて記述した。

ここで、参考のため、まず、H夫妻の略歴と両親について簡単に記しておく。

H夫人

- 1911年5月7日 ブラウンシュヴァイクで誕生
職業は建築事務所における商業簿記用事務員、1932年から
1933年の間は失業
- 1925～1927年 自由体操協会会員
- 1928年 ブラウンシュヴァイク・アイントラッハト会員
- 1925～1933年 職員労働組合中央同盟組合員
- 1936年 壁紙貼り職人と結婚

父：1880年にブラウンシュヴァイクで誕生，1945年にナチの政治犯として死亡。

職業は配管工で，1919年から1933年までは建物の管理人として勤務した。

SPD 党员およびドイツ金属労働者同盟員，ドイツ・フリーメーソン協会員，世界父母連盟員，エガリテ合唱協会員

母：1882年にフェーヘルデで誕生，1959年にブラウンシュヴァイクで死亡。

職業は女中。1907年の結婚後は主婦，1919年から1933年の間は掃除婦。

1920年より SPD 党员，ドイツ・フリーメーソン協会員，世界父母連盟員
 出産は4回で，その内1回は死産。

H氏

1907年6月14日 ブラウンシュヴァイクで誕生

職業は壁紙貼り職人と室内装飾職人

1921年より 社会主義プロレタリア青年同盟員 SPJ

1921～1932年 鞍製造職人・壁紙貼り職人同盟員

1929～1933年 フライエ・フォルクスビューネ青年部，ライヒスバンナー
 党员

役職：社会主義プロレタリア青年同盟の副会計係

父：1875年にブラウンシュヴァイクで誕生，1954年に同地で死亡。

職業は本の印刷工，未熟練労働者。

ドイツ工場・農業・未熟練労働者同盟員

母：1874年にブラウンシュヴァイクで誕生，1958年に同地で死亡。

職業は缶詰工場労働者。未組織，出産は5回。

1. 両親について

[H夫人]

私の父は、1880年8月8日にブラウンシュヴァイク *Braunschweig* で生まれました。父は、配管工の親方の元で働いていました。つまり、親方の元で、1年間、徒弟修業し、ここですぐに、兄弟子の職人に労働組合に誘われたのです。親方の名前はヴァーレンドルフ *Warendorf* でした。もうこの親方の店はありません。その後ルター工場 *Lutherwerk* で配管工として働きました。その後は、『フォルクスフロイント』『*Volksfreund*』で管理人として働きました。父は、当時、『フォルクスフロイント』の管理人として、本来の職業の配管工で稼いでいたかもしれない賃金よりも、ずっと多い給料をもらっていました。でも、父は、朝早くから夜遅くまで仕事をしていました。管理人の仕事をしているからには、それは本当に仕方なかったのですが、父は、会議の最中に電気が消えたりするとすぐ直しに行ったり、暖房係も担当していました。当時はまだコークスで暖房していましたから、冬はとても大変でした。中庭を掃除したり、通りを掃いたり、敷石の舗道の修理をしたりと、本当にいつも仕事に追われていました。彼が唯一の管理人だったのです。

ナチにここを追い出された後、ほんの短い期間だったのですが、アウトバーン建設現場で働きました。そして、1933年以降は、また配管工としてヴンダリッヒ社 *Wunderlich* で働いたのです。

父は、母との結婚前に、結婚していたこともありませんし、私生児でもありません。両親は1907年6月23日に結婚しました。叔母グレーテ *Grete* の誕生日と同じ日です。父方の祖父はカトリックだったのですが、新教の妻と結婚しました。それで、その子供たちは、新教で洗礼を受けました。私の両親は結婚前に、公けに婚約していました。

父は、まず徒弟修行中に労働組合に組織されました。ドイツ金属労働者同盟 *Deutscher Metallarbeiter-Verband* です。私が生まれた時には、父はもうSPDの党员でした。間違いなく、彼が結婚した1907年には党员だった、と確

信しています。私は彼の党員手帳を持ってはいません。私たちの家にあった、とても素敵なライティングビューローの中に書類などを入れていたので、多分、党員手帳もその中に入っていたと思います。でも家が瓦礫となり、その時にいっしょに失ってしまったので、正確にはわかりません。他には、ドイツ・フリーメーソン協会 *Deutscher Freidenker-Verband* や「エガリテ」 *Egalité* という合唱協会にも入っていました。「エガリテ」も社会主義者たちの集まりでした。私も後に、つまり4年か5年前までですけれど、この「エガリテ」を前身とする合唱協会に入っていました。私の舅も合唱協会に入っていました。これもその間に私が入っていた合唱協会と一緒にになったものです。父は、スポーツマンではなかったのですが、スポーツをしなければならない、といつも言っていました。

父は、1914年から1917年まで戦争に行っていました。そして17年にブラウンシュヴァイクのブロイツェム *Broitzem* の空軍基地に来たのです。17年以降は、ブラウンシュヴァイクに駐留する部隊の所属でした。というのも、母が末の弟のお産で生死をさまよったので、父の親戚が請願書を出したからです。母の4番目の子供です。母は、それまでに私のすぐ上の子供の死産を経験していました。

フリーメーソン運動は、私たちが『フォルクスフロイント』の家に住んでいた20年代に始まりました。その後、両親は世界父母連盟 *der Weltliche Elternbund* に入ったのです。弟たちは、「世界」の授業を受けていますが、私にはまだこの科目はありませんでした。

私の父は、普通の死に方をしたわけではありません。父は、まずアンハルト地方 *Anhaltisch* のコスヴィツヒ *Coswig* の刑務所に入れられました。彼は1年の服役刑を受けたのです。1944年8月のことでした。その後、彼は配管工だったので、コスヴィツヒからデッサウ・ロスラウ *Dessau-Roßlau* の、ユニカーの工場に配属され、バラック棟に入れられていたのですが、生き延びることができずに、45年3月17日に亡くなったのです。45年3月のロシア軍進駐の直前のことでした。私たちは、その時、ブラウンシュヴァイクにいま

したが、私が送った父宛ての手紙が返送されてきました。そして、父は、肺炎が原因で死亡したという刑務所長からの母宛の公式な通知を同時に受け取りました。

そこでの朝の洗顔というのは、受刑者はみな、裸で並びます。ホースで水をぶっかけられて、体を洗い、それで終わりです。水の鞭です。寒い時期に、年とった男の人にホースで水をかけたりするなんて、考えてもみてください。暖かい下着もなしにです。あの青い上下のドリル地の作業服だけでした。水をぶっかけられて、ポロ服を身にまとい、仕事に出たのです。それに朝は何も食べる物もなかったのです。それで彼はそこで肺炎で亡くなったと通知には書かれていました。毎朝、こんな拷問をされたら、肺炎が原因で亡くなるのも当然です。

私は、戦後すぐに、一度、非合法に国境線を越えてコスヴィツヒ刑務所へ行きました。そこで父の書類をもらい、そして、父がどのようにして亡くなったのかを知っている人に接触したいと思ったのです。当時の刑務所の医者とも、そこで話をすることができました。その医者は、とても鮮明に状況を語ってくれました。彼は父のことをよく知っていました。父は、小柄で、生き生きとした男性だったということです。そして、父がとても良く手当を受けたということでした。

でもそこでは、父は、他の二人の同僚と一緒にいたのですが、一人は、逃げのびて、母を訪ねて来ました。彼が話したところでは、デッサウ・ロスラウ・アルミニウム飛行機整備ユンカー工場というのが正式な名前ですが、父ともう一人の同僚は、ここでSS（ナチス親衛隊）の監視兵に射殺されたということです。当時、どこでも同じでしたが、すべての政治犯が射殺されたということです。父はの遺骸は、デッサウ・ロスラウに埋葬されています。父は、まだ65才でした。

家では、もちろん『フォルクスフロイント』を読んでいましたが、私たちの家には、いろいろな新聞がありました。つまり、交換してもらった新聞な

のです。『アルゲマイネン・アンツァイガー』‘*Allgemeinen Anzeiger*’、『ノイエ
ステン・ナッハリヒテン』‘*Neuesten Nachrichten*’、『ブラウンシュヴァイガー・
ランドスツァイトウク』‘*Braunschweiger Landeszeitung*’、『ブラウンシュヴァイ
ギッシェ・シュターツツァイトウク』‘*Braunschweigische Staatszeitung*’な
どのブラウンシュヴァイクの地元の新聞が、何部かの『フォルクスフロン
ト』と交換されて、その一部を父が家に持って帰っていたというわけです。
父は、それらの新聞をすべて読んでいました。それが父の趣味でもあったの
です。つまり、新聞を読むのが父の趣味でした。ただ、その趣味は、とくべ
つにお金がかからなかったという理由からなのです。

しかも、父は、ブラウンシュヴァイクの新聞だけではなく、外国の新聞も
読んでいました。父は外国語は読めませんでしたから、スイスのドイツ語新
聞の『バースラー・ナッハリヒテン』‘*Basler Nachrichten*’です。

私たちの家にラジオが入ってからは、父はいつもベロミュンスター *Ber-
omünster* を聞いていました。この中立国からの意見が、彼にとっては重要
だったのです。彼は、ラジオで聴いたことをヴングリッヒ社で宣伝しました。
戦争に負けているということを、父はヴングリッヒ社での朝食の時に言った
のです。それを守衛が密告しました。外国の放送を聴いたのが、サボタージュ
と見なされたのです。

父は、それ以前にも、国会議事堂の火事に関する、(茶色の)外交文書記録
書を広めたため、国家反逆罪で起訴されていました。この記録書も外国から
入ってきたものでした。モスクワ経由で公式にきたものです。この時代は、
共産党員と社民党員と一緒に活動しました。どちらも、いっしょに綱を引い
ていたのです。それで、そのために、父は拘留もされたのです。35年のこと
でしたが、そのため9カ月の刑をくらいました。最初はまず、国家反逆罪で
したが、その後、変わりました。4月20日のヒトラー誕生日の恩赦があっ
たのです。いずれにしても、大変な目に合いました。私は、もうそのことを
考えたくもありません。

私たちの結婚式の3日前でしたが、私は裁判を傍聴しました。ここに警官

がひとり、あそこにもう一人の警官がという具合で立っていて、裁判所の玄関には2本の銃剣も立てかけられていたものです。そして、私たちは、結婚の日に直接、父をブラウンシュヴァイクの拘留所に訪ねました。私たちは、そこで指輪の交換をしたのです。不幸中の幸いでした。まあ、検事の同情腺を刺激したようなのです。

母も拘留されていました。彼女も共犯罪に問われたのです。父は、失業時に、ダム *Damm* の毛皮屋のツォイナーの *Zeuner* の隣で、新聞スタンドをもっていました。そこへ古い同志たちがやって来て、その中にはラジカルな左翼の同志たちもいました。彼らが、あの茶色の外交文書記録書を公けにしたのです。それが新聞スタンドの品物台の下で交換されたのです。そこへ丁度、母がやってきたりして、母は本当に何も知らなかったのですが、彼女は秘密を知っていたとされて、6週間、拘留されました。罪は6カ月以上ではないということで、彼女も恩赦を受けて、6週間後に自由になったのです。ちなみに、ヒットラーは毎年、この恩赦を行っていました。彼女に対する裁判は行われませんでした。

まず最初に国家反逆罪そして内乱罪へと切り替えられて、父の裁判は行われました。

私の母は、1882年12月28日にフェーヘルデで *Vechelde* で生まれました。母の母親は、彼女の出産で亡くなりました。母は双子ですが、もう一人の双子の妹も亡くなりました。ちなみに、彼女の母親は、祖父の2度目の妻だったのですが、それ以前に一度、結婚していました。母の父親が亡くなったのは、母が15才の時のことです。それで母は、遠い親戚、つまり、私の祖母のいとこを頼って、1897年に、ブラウンシュヴァイクに来ました。母は、フェーヘルデ *Vehchelde* で学校に通っていました。

彼女の宗教は新教でした。正式な職業と言えるほどの職業教育は受けていません。結婚前は、ブラウンシュヴァイクの親戚の家で女中奉公をしていました。結婚して、専業主婦になったのです。母は、父と知り合う少し前に、

どこか他人の家で家事手伝いをし、料理を習った後に、あるホテルで料理人の修業をしました。そして、1907年に父と結婚したのです。私達が『フォルクスフロイント』に住んでいたときは、編集室や労働組合の事務局を掃除していました。でも、『フォルクスフロイント』の建物内だけです。

[H氏]

私の父は、1875年2月25日にブラウンシュヴァイクで生まれました。父の職業は、本の印刷工でしたが、どこで職業教育を受けたのかはわかりません。彼は、何も話してくれなかったのです。親戚たちとはまったく付き合いがなかったし、今もないのです。父もその父もブラウンシュヴァイクで生まれています。父から聞かされていた先祖の話は、こうです。つまり、最初二人の兄弟がプファルツ地方 *Pfalz* から来たということです。ひとりはフランツ *Franz* といい、もうひとりはウィルヘルム *Wilhelm* という名前でした。だから、私たち以外にもHという名字の家はたくさんありますが、各々のH家にはウィルヘルムとフランツと名付けられた人がたくさんいます。

父も、1931年以降、失業していました。20年代は仕事に就いていました。31年以降は、私の家族はみな失業しました。まず、29年に私が缶詰プレス工場で、そして30年に父が失業しました。失業中、私は失業保険金で生活していました。失業保険金の後は生活保護も受けました。父は福祉事務所の社会扶助を受けていました。私と私の一番上の兄は生活保護を受けましたが、2番目の兄のクルト *Kurt* も生活保護を受けていたのかどうかは、知りません。私たちは、一家で3人の男が生活保護を受けていたわけです。

失業して、最初は失業保険金、それが切れると社会扶助金になり、そして生活保護を受けるという順序です。福祉事務所の生活保護の金は、返さなければならなかったのですが、アドルフ・ヒットラーの時代後は、返さなくてもよくなったのです。彼は良いこともしたものです。まあ、それは冗談ですが。アドルフ・ヒットラーのもとで、5月1日のメイ・デーが法定の祝日ではなくなったのですから、いくらか良いこともしなければ、労働者を獲得で

きなかったでしょう。

昔、私達の両親の時代には、選挙のために市民手帳が必要でした。そのための出費があつたにもかかわらず、父は市民手帳を持っていました。彼は100パーセント、SPDを選びました。それに彼はいつも100パーセント、ナチに反対していました。でもナチに対する抵抗運動はしませんでした。私の親戚たちもナチに反対でしたが、何もしませんでした。多くの人がそうでした。

父はSPDの党员ではありませんでした。彼は金属労働者同盟員で、労働者合唱協会にも入っていました。それに1919年から、フランクフルター通り *Frankfurter Straße* のタール作業所のベーゼ&マイアー社 *Beese & Meier* 経営協議会の労働者代表委員長でした。この会社が倒産するまで委員長をしていました。いつ倒産したのかは、はっきりとは知りませんが、1920年代の中頃だったと思います。父は、兵隊に行く前から、つまり、1914年以前からこの工場で働いていたのです。戦争には、4年間、行っていました。その後、父は、シュトライトベルク *Streitberg* の屋根葺き用アスファルト・フェルト製造工場のミルシュ社 *Mirsch und Co.* で働きました。

私の父は、母以外の女性と結婚していたこともありませんし、私生児でもありません。私の両親は1900年5月19日にブラウンシュヴァイクで結婚しています。私たちの結婚の日と同じ日です。私の両親も妻の両親も教会で結婚式を挙げています。私の両親は新教です。私の両親は婚約していましたが、どの位の婚約期間であつたのかは知りません。母は74年に生まれ、父は75年生まれですから、4週間ほど父が年下でした。各々の誕生日が12月と1月なのです。両親は、近所に住んでいて、子供の頃からの知り合いでした。

父の両親が2軒の家を持っていたので、母は父を、いい結婚相手だと思ったのです。両親がそう言っていました。1軒の家は、どこだったのか知りませんが、もう1軒は、私の娘が看護婦の教育を受けていた時に、生活の資に売りました。これらの家は、父ではなく、祖父のものだったのです。当時は、

たとえそのために借金をしようが、家を持つということが自慢の種だったのです。母方の祖父母も家を持っていましたが、借金もしていたのです。でも、9人も子供がいたので、何も財産は残しませんでした。しかも、その上、子供たちはインフレの時代にその家を買ったのです。その家はカスターニエンアレーにあったということです。

父は、1954年12月、80才の誕生日の少し前に、ブラウンシュヴァイクで亡くなり、母は、4年後の1958年に84才で亡くなりました。

私の母は、1874年12月28日にブラウンシュヴァイクで生まれました。妻の母と同じ誕生日です。私の母は、父と同じく、大変暖かい人でした。

私は父とも、両親とも問題はありませんでした。細かなことに至るまで、すべてうまくいっていました。しかし、大体は、母が家族の先頭にたって、家族をまとめていたのです。家族が団欒するときには、楽しく話し合うようにもしました。父は、寡黙な人で、母よりも頭が良かったにもかかわらず、あまり話をしなかったのです。

父は、金の心配は何もしませんでした。私の両親は、本当にお金がなかったのです。だから、母は、缶詰工場でアスパラガスの皮むきをして働いていました。ダウベルト社 *Daubert* と、主に家のすぐ隣のムンテ社 *Munte* で働いていました。アスパラガスは、5月から6月にかけてしか出ませんから、いつもこのシーズンだけです。当時、5人の子供を抱え、この時代では、普通の工場労働者はほとんど稼ぎがありませんでしたから、労働者は、私の妻の家のようにはいかなかったのです。

私の母は、アスパラガスの皮むきで、一生懸命働いて、父の稼ぎの2倍も稼ぎましたが、冬は主婦として家にいました。家で内職はしませんでした。

アスパラガスの皮むきは、工場でしていました。豆の殻むきと人参の皮むきは、家でできましたが、アスパラガスは、皮をむいてしまうと、酸っぱくなるので、すぐに手早く処理して缶詰にしてしまうのです。だから、アスパラガスを家にもってきて、皮むきをさせてはもらえなかったのです。30年代

に私が妻と知り合った頃には、母は、もう缶詰工場で働いてはいませんでした。

2. 兄姉たちについて

[H夫人]

私には、二人の弟がいました。他には、私の生まれる前に女の子を死産したと母から聞かされました。弟たちは、それぞれ1914年1月21日にカール *Karl* が、そして1917年9月21日にゲアハルト *Gerhard* が、ブラウンシュヴァイクで生まれました。どちらも第二次世界大戦で戦死しました。私の弟たちは戦死してしまいましたし、夫も妹がまだ生きているだけで、あとはみな亡くなっています。

[H氏]

私の両親は、3人の男の子と2人の女の子、全部で5人の子供を生みました。

一番上の兄のフェルディナント *Ferdinand* が1901年2月20日、二番目の兄のクルト *Kurt* が1902年8月18日、姉のエラ *Ella* は1904年9月10日、私が1907年で、妹のヒルデガルト *Hildegard* が1914年5月16日に生まれました。みなブラウンシュヴァイクで生まれた、生粋のブラウンシュヴァイクっ子です。下の二人だけがまだ生きていて、兄たちと姉は、年の順になくなりました。私の兄も姉も、病気になったこともなく、とても健康に見えたものです。一番上の兄は1967年に66才で亡くなり、クルト *Kurt* は5年前の1974年に、72才で亡くなりました。姉のエラは、1977年に73才で亡くなりました。

私の兄弟姉妹たちは、労働組合には組織されていましたが、入党はしていませんでした。それほど政治的ではなかったのです。経済的な理由が大きかったのです。

3. 両親の家の住居

[H夫人]

〈アルテ・ヴァーゲの家〉

私は、1911年、アルテ・ヴァーゲ *Alte Waage* 17番の家で生まれました。ちょうどアンドレアス教会 *Andreaskirche* の後ろ側の家です。とても美しい家でした。以前はジャガイモと野菜を商っているクリューガー *Krüger* の店もありました。大きくて素敵な中庭もありました。中庭への通路は欄干で飾られていて、アルコーヴとか周歩廊とか呼ばれているような造りでした。今風に言うと、バルコニー式の通路とでも呼べばよいのでしょうか。住居自体は、とても広い、台所と4部屋のある住居でした。他の住居からは独立したもので、「住居の中の廊下」もありました。バス・ルームはありませんでした。私が初めて見たバス・タブは、『フォルクスフロイント』の住居ででした。トイレも住居の中にはありませんでした。

当時、ここには父方の祖父と一緒に住んでいました。それに、両親と小さな私の4人で住んでいたのです。祖父の名前は、フランツ・シャイデ *Franz Scheide* といいましたが、1913年に亡くなりました。私たちは、ここには2年間だけ住んで、1913年にトゥルニア通り *Turnierstraße* の8番に越したのです。よくわかりませんが、多分、祖父がいくらかお金を出していたのでしょうか。

〈トゥルニア通りの家〉

この家は、ハイデン通り *Heydenstraße* のそばです。親子3人には広すぎたから、ここに越してきたのです。今度は3部屋の住居でした。この住居にも15年頃までの2年間くらいしか住んでいません。とても素晴らしい、独立した住居で、住居内に廊下もありました。地下室も屋根裏の洗濯物干場もありましたが、トイレもバス・ルームもありませんでした。大きな台所がありました。物置があったかどうかは、覚えていません。この住居には、最初、両

親と私だけが住んでいましたが、1914年に弟のカールが生まれました。

この家は本格的な裕福な市民用の家でしたから、とても素晴らしい家でした。今、福祉事務所のある場所には、以前、マルティーニ教会 *Martinkirche* があり、ハイデン通りには女子中等学校がありました。トゥルニーア通りは、ゾンネン通り *Sonnenstraße* からペタジーリエン通り *Petersilienstraße*、またはジュート通り *Südstraße* へ下った所まででした。この間には小さな通りや狭い小路がたくさんあって、それらすべての名前は、今、思い出せません。残念なことに、空襲で爆撃されてしまいましたが、そこには、とても素晴らしい古い家々が並んでいました。角地には、風景画に出てくるような家があったのです。

〈カンネンギーサー通りの家〉

1915年に、カンネンギーサー通り *Kannengießerberstraße* 34番に越し、そこに1919年まで住んでいました。今度は、4部屋の住居で、下の階へ行く途中の階段室にトイレがあったのを覚えています。台所と短い廊下がありました。それに屋根裏と地下室もよく覚えています。掃除道具を入れておくための物置も住居の中にありました。ここで、17年には弟のゲアハルト *Gerhard* が生まれました。私たちは3人きょうだいですから、両親と子供3人の計5人で、ここに住んでいたわけです。間借り人も親戚の者も一緒に住んだことはありません。ただ、ときどきラインラント *Rheinland* 地方から親戚が訪ねてきました。この住居で、私はブラウンシュヴァイクの革命を体験しました。この家は、ブリューダー教会 *Brüderkirche* とツォイクホーフ *Zeughof* の中間にあって、私たちの住居は3階だったのですが、背の高い建物でしたから、窓からは、よその家々の屋根を見下ろしていたものです。カンネンギーサー通りに建っていた家々は、全般的には、木組みの家が多く、ブラウンシュヴァイクの古い町並みの一角だったということです。

カンネンギーサー通りの私たちの家の向かい側の家の屋根窓から銃撃があったのを、覚えています。しかも、その場で、じかに見たのです。銃撃戦

がどんな風に行なわれたのかをまだ覚えています。もちろん、それはちょっとした、ほんの小さな蜂起でした。彼らは、当時、スパルタクス団と言っていた組織で、典型的な、つまり、明らかなプロレタリアーでした。この銃撃戦は、すぐに終わりました。

それから、ノスケ *Noske* の一隊が、メルカー *Maercker* 将軍と一緒にブラウンシュヴァイクに行進して入ってきた時のことを、まだよく覚えています。私は古い駅に立って、それを見ていたのです。1918年のことでした。

〈シュロス通りの『フォルクスフロイント』の家〉

次に、私たちは、シュロス通り *Schloßstraße* 8番の『フォルクスフロイント』社屋内の住居に住みました。父が1919年から、このフォルクスフロイントの家の管理人として働きはじめたのです。

それまで、父は、1917年から飛行隊第7補充隊の駐屯するプロイツェムへ行っていました。飛行場もここにあったのです。そして1919年まで、プロイツェムの飛行隊の清算事業団で働いていたのです。父は、配管工だったので、今風に言うなら地上勤務員というのでしょうか。ほんの短い間ですが、ここで労働者・兵士職場委員会 *Arbeiter-Soldatenrat* の委員になりました。労働者階級からは、唯一、父だけが委員に選ばれて、他の委員はみな飛行隊補充隊士官だったのです。父は18年の9月までは、たしかに兵隊だったのですが、その後は、軍隊がなくなりましたから、清算事業体に属していたのです。もちろん、清算が終わったら、「解散だ」と言われて、父は、党の友人仲間に聞いて回り、管理人の仕事につくことができたのです。後に父が母に語ったということですが、管理人の仕事が安定していたからということでした。

『フォルクスフロイント』の住居には、4部屋ありました。いつも大きな住居にめぐまれて、ラッキーでした。私の舅姑は、5人も子供がいたのに、その程度の大きさの住居には住めませんでした。私の両親の家は、それほどプロレタリア的ではありませんでした。私の父は、たぶんお腹いっぱい食べることのできる市民階級の出身だったのでしょうか。つまり、金持ちの市民では

ないけれど、小市民階層の出身だったのです。ここの住居には、廊下、地下室、屋根裏の物干し場、それに住居内に洗濯室までありました。私たちが引越してくるまでは、住居はひとつしかなかったのです。

後に、USPD と SPD が合併し、労働組合がみな入居してきました。そして、たとえば調整局などの戦時機関が『フォルクスフロイント』の建物内にあったのですが、こういった機関は、1920年から1921年に退去しました。赤い城と呼ばれていた、『フォルクスフロイント』社屋内の党書記局事務所は、4階にありました。下の階は経理課でした。ブラウンシュヴァイクの近郊も含めた大きな郡支部とブラウンシュヴァイク市支部の二つの党支部事務所が入っていて、どちらも独立した事務所で、書記長も各々別にいました。そこへ、20年か21年ですが、一度に昔の労働組合がこの建物の中に入ってきたのです。主だったものでは、金属労働者同盟 *Metallarbeiterverband*、木材労働者同盟 *Holzarbeiterverband*、書籍印刷工同盟 *Buchdruckerverband*、衣料労働者同盟 *Bekleidungsarbeiterverband*、食糧・飲料労働者同盟 *Nahrungsmittel- und Getränkearbeiter*、運送労働者同盟 *Transportarbeiter* などのいくつかの名前だけを覚えています。これらの労働組合は、その間、むかし USPD の新聞だった、『フライハイト』『*Freiheit*』社屋に間借りしていました。『フライハイト』社屋は、当時、シュッペンシュテッター通り *Schöppenstedter Straße* にあって、いくつかの労働組合の事務所が入っていたのです。ヴェルダー *Werder* にも労働組合会館はありましたが、私の時代にはもうありませんでしたが、私は父から聞いて、そのことを知っているのです。

このシュロス通り *Schloßstraße* 8番の住居には何でもありました。トイレは、もちろん、住居内にありました。風呂もありましたが、最初は、地下室で入浴しました。これらの設備は、すべて会社、つまり新聞社が整備してくれたものです。『フォルクスフロイント』は、リーケ出版社 *Verlag Rieke & Co.* が出していました。前身は、ハインリッヒ・リーケ社 *Heinrich Rieke & Co.* でした。『フォルクスフロイント』は、社民党の大機関誌として印刷されましたし、だんだん大きくなって、本当に良い会社でした。しかし、それは

ナチがやってくるまででした。その後、『ブラウンシュヴァイガー・プレッセ』‘*Braunschweiger Presse*’が発行されましたが、『ハンブルガー・モルゲンポスト』‘*Hamburger Morgenpost*’同様に、どこでもみな同じく苦勞をした末に、崩壊してしまいました。

昔の労働者は、自前の機関誌を読まなければならないということを知っていました。他の新聞は、金持ちや資産家のためのものです。つまり、有産階級のために書かれています。それで、この機関誌の『フォルクスフロイント』は、そこら辺にいるごく普通の人びと、労働者階級の生活と活動のためのものでした。特に教育してくれるものでした。新聞には教育してくれるような要素がなければいけません。それが、新聞には大事なことなのです。政治のことだけではなくです。たとえば、当時、文芸欄もありましたし、また有能な編集者たちもいました。私は彼らととても良い知り合いになりました。私は、いつもまったく知識に飢えた、若い人間でした。また絵画や線描画の展覧会などにも行きました。それに工芸学校に行っている友人たちもいたり、そのことによって、少しばかり、その世界に惹かれるようになりました。それに芝居などを見にも行きました。当時、芝居の評論家の友人がいて、彼から『フォルクスフロイント』経由の芝居の切符をもらいました。この新聞は、批評のために、一年中、通しの切符をもっていて、つまり、いつも定席を確保していたのです。この切符が、会社の人間にですが、渡されていたというわけです。

ここの住居には5人で住んでいました。私は、この住居でいちばん素晴らしい年月を過ごしました。子供の私にとって、いろいろな興味深いことがありました。私は両親の一番上の子供でしたから、それらしく振る舞わなければなりませんでしたが、ある時は植字工の作業所へ行ったり、ある時は端物印刷の植字作業所、機械植字作業所や、それに下の階の輪転印刷作業所などに行きました。そういう作業所や、そこに入出入りしている多くの人びとも、少女時代の私にとっても大きな印象を与えたものです。

『フォルクスフロイント』でとても素晴らしい時代を過ごしたとは言うもの

の、ナチがこの建物を占拠してからは、とても汚らしく、みすぼらしく見えました。私達が住んでいた頃は、どこもぴかぴかでした。1913年に建てられたのですよ。本当に、際だって美しい建物でした。

[H氏]

私はずっと、今は赤十字ハイムがある、コルフエス通り *Korfesstraße* の向かい側の、カスターニエン・アレー *Kastanienallee* 38番に住んでいました。きれいな住宅地です。母は、ここで生まれたのです。カスターニエン・アレーのはずれのプリンツェン公園 *Prinzenpark* へ続く場所でした。

4. 労働者居住地域の様相

[H氏]

ランゲ通り *Lange Straße*、マウアーン通り *Mauernstraße*、ヴェーバー通り *Weberstraße*、クリント *Klint*、ヴェルダー *Werder* に住んでいる労働者は、私たちとは区別されるべきでしょう。これらの通りは、純粹に労働者の住む通りで、ここの住人は、はっきりした低階層のプロレタリアーなのです。たとえば、ニッケルンクルク *Nickelnkulk* やノイエ・クノッヘンハウアー通り *Neue Knochenhauerstraße* もこの中に入りますが、これらの通りは、貧乏人中の貧乏人が住む地域なのです。ここら辺は、家賃がもっとも安かったのです。

私たちの住む所には、たとえばプリンツェン公園があつたりして、私たちが自由に走り回れましたが、そこの辺りでは狭苦しい場所にみんなが押し込められて暮らしていました。家々には中庭はなくて、家の後ろに空き地があるだけでした。ランゲ通りなんて、ひどいものでした。ランゲ通りは、現在、新市庁舎が建っている通りで、シュティフトガッセ *Stiftgasse* によって、分割されていました。ランゲ通りの中でも、中へ入っていくと、違いがありました。手工業の親方も住んでいたものです。

キュッヘン通り *Küchenstraße* や、そのランゲ通りのシュティフトガッセへ通じる右側の方には、労働者が窒息しそうなほどにぎゅうぎゅう詰めになって暮していました。通りでは、人びとが、地べたに坐っていました。そういう労働者の住む場所だったのです。マウアーン通りを通り抜けようとしても、通り抜けることはできませんでした。一度など、私は、車道を歩きました。なぜって、南京虫が寄ってくるような気がしたからです。マウアーン通りの、片側の家々には、庭がありませんでした。つまり、家々の背後の庭が、すべてシュッペンシュテッター通りの家々に属していたからです。この界隈の労働者は、とにかく密集して、狭っ苦しい環境に住んでいました。だから、私たちの住環境とは、まったく違ったのです。でも、私は彼らと色々なことを一緒にしました。

ベッケンヴェルカー通り *Beckenwerkerstraße* は、これらの通りほどに悪い状態ではありませんでした。その通りには、きちんとした人びとも住んでいました。ランゲ通りが、もっともがらの悪い通りでした。昔は、ベッケンヴェルカー通りとノイエ通り *Neue Straße* の住人は、みな手工業者者だったので。ベッケンヴェルカー通りとノイエ通りの家並みの後ろ側は、どこも大きな庭でした。素晴らしい庭でした。

私たちの家には、マリーエン通り *Marienstraße* に向いた、とても大きな庭がありました。大きな果樹園もありました。この庭にない果物は、ミュッケンブルガー池 *Mückenburger Teich* の後ろの、城の、領主の庭から静かにこっそりと、無断で持ち去りました。それが何を意味するかは分かると思います。しかし、これは、ヴェーパー通りやランゲ通り、あるいはマウアーン通りや、クリント、ヴェルダーなどで起こることとは、別物なのです。秋になると、私たちは農園からジャガイモの残りを掘ったりしました。もちろん裸足で芋掘りに行きました。私たちは、自由にそんなこともできたけれど、彼らはできなかつたのです。ミュッケンブルガー池では、遊泳禁止でした。監視人が来るかどうか見張りをし、監視人が来ると、服を着たまま、池の中に入って隠れましたが、彼らは、外に立っていました。私たちは水の中です。彼らは

外で立ちんぼうなので、諦めて帰りました。

[H夫人]

子だくさんで、父親と母親の両方が働いている家庭の母親たちは、本当にやつれて見えました。労働者の家庭の母親たちは、ケーテ・コルヴィッツ *Käthe Kollwitz* の女性労働者の像みたいに、心痛のためにやつれて見えました。彼女たちの髪はくしゃくしゃでしたし、本当に惨めに見えました。栄養不良の母親たちもいたのです。私たちがカンネンギーサー通り 34 番に住んでいたことがあります、いろいろな家が並んでいて、ジブシーの住む家もありました。また古くて崩れそうな家が、たくさんありました。

5. 学校生活

[H夫人]

私の時代は、学校では、その昔のように、怒られたりすることはありませんでした。私たちの学校にいた年寄りの先生のことを覚えています、彼は、クラス担当ではなく、病気の先生の代わりに一度だけ、私たちのクラスに来たのです。その彼が滑って転んだのです。ちょうど、長い休暇が終わった後で、学校の教室の床に油が塗られていたからです。子供たちはみな、笑いました。そこで、第 1 列目の生徒は、ほっぺたを少しばかり、なでられただけでした。しかし、他の生徒たちは、前に出て、図突き棒でお尻を叩かれました。その 1 回きりでした。他には思い出せません。1918 年以降は、教師たちも、いろいろな点で、少しは、改革路線にのったのです。

私のクラスで一番成績の悪い女の子がいましたが、彼女は、いわば、いじめられっ子でした。学校で、余りよく勉強のわからない子がいると、その子は、いつも馬鹿者と言われました。昔は、教師が、たくさんはいなかったから、こういった少し理解力の劣る子供たちの面倒をみる暇はなかったのです。

多少とも、罰として課せられる宿題は、ありました。あるいは、居残りさ

せられました。でも、居残りの生徒たちは、その間、ただ坐っているだけでした。その間、教師はクラスの成績をつけたりする仕事をしていて、居残りの生徒の方も見ないのでから。

私の同級生にバレエを習っている女の子が二人いました。彼女たちは、香水をつけていたのですが、まったく清潔というわけではなかったのです。つまり、下着をよく替えていないような臭いがしたのです。だから、教師達からも変な目で見られました。私達も嫌悪感をもっていました。私達には、なんだか「みだら」に感じられたのですが、でも、彼女たちの生きている世界は、私達とは別の世界だったのです。彼女たちは、虱疥癬もちでした。私は、その一人の女の子から虱をうつされました。当時、虱は学校生活にはつきものでした。

私は、スポーツ協会の活動を通じて、すべての学校の体育館だけは、よく知っているのですが、ハインリッヒ通りの国民学校の体育館は、木の床でした。古い学校はみな、木の床でしたが、コメニウス通りの体育館は、リノリウムの床でした。この学校は、当時としてはモダンな学校だったのです。

[H氏]

私は、まずハインリッヒ通り *Heinrichstraße* の国民学校に、それから、さいごの2年間は、コメニウス通り *Comeniusstraße* の国民学校に通いました。コメニウス通りの国民学校は、昔は中級市民学校でした。昔は、学校制度が今と違って、下級と中級があったのです。それに、授業料を払わなければなりません。下級の方では、6学年に分かれていました。6学年の上に、さらに中級のクラスがあるのです。最初に6年間通い、それを終了すると、さらに2年間、中級クラスに通うので、8年間通うのです。私は1907年に生まれ、1913年に国民学校に入学しました。1919年までの、最初の6年間をハインリッヒ通りの国民学校で過ごして、その後、コメニウス通りの学校に通ったのです。コメニウス通りの学校は、最近、創立75年を祝いました。

ハインリッヒ通りの学校では、教師が生徒を殴りました。プランゲという8人兄弟の家の生徒が、いつも朝、教師に何か質問され、答えられずに、尻をぶたれていました。良く理解できない子に対して理解がなかったのです。教師たちは何もしてやらなかったのです。「お前はできなかったのか？ ここに来い。尻をぶってやる」と、それで良しとして、他には何もしなかったのです。

学校では、労働者の子供たちは、差別されました。ケースにもよりますが、たとえば、私のクラスには、二人の子供がいました。ひとりの子の親は、マリーエン通りに櫛の製造工場をもっていました。もう一人の子もそのような裕福な親でした。この二人の子供は、いつも教師にひいきされていました。当時は、悪い時代でしたが、彼らは、良い服を着ていました。彼らは、私たちよりも、はるかに良い身なりをしていたのです。身だしなみがよく、きちんとした外見をしていると、もちろん、ずっと良く評価されるのです。彼らは、一度として教師に殴られたことはありません。労働者の子供たちが、いつも殴られていたのです。プランゲと、それにもう一人、マウアーン通りから通っていた子供も、いつも殴られる場にいました。しかし、プランゲは、決して目立たない男の子だったので、何故いつも殴られなければならなかったのか、本当にわかりません。

コメニウス通りの学校でも殴打はありましたが、前の学校よりは少なかったのです。教師によるのです。そういう教師ばかりではなかったのです。同じ学校のある教師は、子供たちのために、何でも持ってきてくれました。父親が兵隊の子供にも何かと物を持ってきたのです。どの教師もそうだったというわけではなかったのですが、このグロートヤーン *Grotjahn* という名前の先生のことは、よく覚えています。彼は、リュニッシュ池 *Lynisch Teich* の近くに家庭菜園を持っていました。

6. 子供時代の労働と遊び

[H夫人]

ケーゲル場で、倒れたケーゲルのピンを立てる手伝いをし、お金をもらったことはありますが、他には仕事をしたことはありません。お金といっても、硬貨をいくつかもらっただけです。これは小遣いとして使いました。家の生活費の足しのために、両親に渡すということはありませんでした。

私は女の子ですから、もちろん、家事を手伝わなければなりません。家事に関する最初の知識は、母から教わりました。私の母は、家事のすべてのことをいくらかできるように私を躾たのです。靴磨きや、当時は、アイロンかけの仕事も大事でした。アイロンかけは、14才になってはじめてしましたが、私は、家政科の学校に通い、そこでアイロンかけも習ったのです。縫い物も習いました。

私の家では、母が主として家事をしていました。本当に、父は家事については、まったく亭主閑白だったのです。

『フォルクスフロイント』社屋のすぐそばのエルシュレーガー通り *Ölschlüger Straße* 10 番の家には 10 家族が住んでいました。そこに住む女の子たちは、ほとんどが私よりも 1 才か 2 才年上でしたが、少なくとも 6 人の女の子がいて、私たちは人形遊びをしました。「ラルティエ」*Lartje* と呼んでいたボール遊びもしました。その他にも、板石で舗装された路上で走り回る「エッキ、どこから来るの？」などという遊びもしました。そういう遊びは、今は、もう路上ではできません。決められた面の 4 つの角に向かって走るのです。

シュロス通りの家々にあった、大きな中庭で子供同士で、よく遊びました。女の子たちは、家の中でもよく遊びました。お城の庭でも遊びました。隣近所の同じ年頃の子供たちと遊んだのです。学校の友達ではなく、近所の遊び仲間たちです。私の場合は、ここに親戚がいませんでしたから、親戚の子供たちではありません。少し大きくなってからは、よくハイキングにも行きま

した。

私は、ずいぶんスポーツに時間をさきました。たとえば、夏には、今の市営ホールのある、レオンハルト広場 *Leonhardsplatz* でいろいろなスポーツをしました。週に1度、2時から5時までそこでスポーツをしました。ほとんどラウダーズ（：革製のボールをバットのような棒で打つ競技、各12人の選手からなるチームの間で争われ、多少野球に似ている）をしていました。それからジョキングもしました。カンペ通り *Campestraße* の辺りを走りました。あの辺りにはたくさんの木がありましたが、今はもうすっかり様相は変わっています。

学校時代の最後の数年間は、午後に学校以外で手芸をしました。きちんとした手芸ができるように、12才から習ったのです。この時期には、その他に、速記や体操、民族舞踊をしていました。晩になると、青年組織の仲間と民族舞踊を踊ったのです。民族舞踊は晩だけでした。

私は、子供時代には、とても満足していました。自由になる遊びの時間もたくさんありました。学校の宿題をしてしまうと、他にしなければならぬことはなかったので、一度として自由な時間がないなどと言って、嘆いたことはありません。

[H氏]

子供の頃は、働いた事はありません。せいぜい、ケーゲル場でピンた立ての手伝いで、一晩に3マルクもらいました。もらったお金を何に使ったのかは覚えていませんが、小遣いに使ったのです。私の学校時代は、インフレの時代だったから、石炭運びなんて、石炭がないのにできるわけがなかったのですよ。私の家では、母が主として家事をしていました。私は、食器を洗ったりしましたが、他には、家事の手伝いはしませんでした。だから、自由になる遊びの時間はたくさんありました。私は同じ年頃の子供たちと比べて、自由な時間は多い方でした。

私たちは、プリンツェン公園 *Prinzenpark* のそばに住んでいましたから、

学校が終わると、外に出て遊びました。私たちの家には、5人の子供がいたから、住居の中で遊ぶ余裕はありませんでした。プリンツェン公園は、私たちの狩猟場でした。子供たちは、木を登ったり降りたりして、管理人を怒らせました。今は、プリンツェン公園の中を歩けるけれど、昔は、そうじゃなかったのです。でも、私たちは、中に入って走り回りました。管理人が犬を放して、私たちが芝生の中に入ると、犬をけしかけたものですが、犬はかんだりはしませんでした。鼻面を私たちのお尻に押しつけて、転ばしたのです。犬はそういう風に訓練されていたようです。そういったことは忘れません。

私たちの住んでいた同じ建物の中に、親戚たちも住居を持っていたので、一軒の建物の中に、18人か19人の従兄弟や従姉妹がいました。ものすごく騒がしかったものです。しょっちゅう、殴り合いなんかもしました。私たちは、プリンツェン公園やヌスベエルク *Nußberg*、ミュッケンブルガー池 *Mückenburger Teich*、それにブッフホルスト *Buchhorst* などで遊びました。私は公園でたくさん遊んだので、自然が好きになったのです。「季節が来て、きのこ採りをしたければ、あそこの上の線路の方へ行けばいい」と言った先生がいました。それで、私たちは、ブッフホルストへ行って、茸採りをしました。それで、今でも私は茸のことを良く知っているのです。

それに、キルシェンアレー *Kirschenalle* でサクランボを盗ったりとか、その年頃の男の子たちが好むようなことをしていました。今、警察のスポーツ協会がある場所は、当時、砂の採取地跡の大きな穴でした。そしてプリンツェン公園の前の砂の採取地の穴は、小さかったのです。ここで、小さな子供の時に遊びました。その後ろの方の大きな穴では、大きな子供になってから遊びました。その後ろ側をずっと歩いてい行くと、ミュッケンブルガー池がありました。この池は、今はリュウニッシュ池と呼ばれていて、スポーツ場になっています。私は、ミュッケンブルガー池で泳ぎをおぼえました。私がぜんぜん泳げないのに、兄たちは私を池の中に放り投げ、それで泳ぎをおぼえ

させられました。

7. 親子関係

[H夫人]

私の母は、勤勉で、清潔で、きちんとした女性でしたが、とても冷たい性格の人でした。彼女は母親の愛情を知らずに育ったのです。私たちも同じです。昔は、子供は今のよう甘やかされませんでした。彼女は、私にとっては、いつもきちんとした良い母親で、私は父親っ子でした。父も、小さい頃から私を可愛がってくれました。私の家では、そういう家族関係だったので

私の父は、子供たちにたいしては高飛車で、殴られたこともあります。私の弟は、棒で叩かれたこともあります。それは、彼が落第した時のことで、激しい殴打を受けました。それにたとえば、嘘をついた時です。とても厳しかったので、時々、嘘をつくことになって、ばれた時は、それこそ大変でした。

母は、殴ることはなく、説教だけでした。私の父自身も厳しく育てられたのですが、彼は、多分、それで自分をいくらか発散させたのでしょう。私は、だから、いつも「そういう風にあなたの子供たちを育てるべきじゃないわ」とも言ったものですが、でも私は、父をとっても愛していました。私が父から最後に一発お見舞いされたのは、もう夫と付き合っていましたから、かなり大人なってからです。母が「お前は何時に帰ってきたの?」と訊いたので、私は「12時を回ってたわ」と答えたのです。

14才になった後、大目玉をくらったのは、靴を買ってもらった時のことでした。父は、このような物には、とても細かかったのですが、私は、自分で靴を買ってくるようにと父から15マルクもらい、学校へ行きました。私は15才か16才でした。靴屋にはベージュとグレーの素敵な色の靴がありまし

た。20年代に、この色が流行したのです。この靴が15マルク50ペニヒでした。父は、「15マルクだけだよ。それ以上はダメだ」と言いましたが、私は、だだをこねて、とうとう父は、50ペニヒを私の頭に投げつけたものです。もう一度、靴屋にお金を持っていき、お目当ての靴を手に入れましたが、5マルクの靴もありました。でも、これは、とても簡素な靴だったのです。本当に父は、ここまでは良いが、それ以上はダメだなどという原則を振りかざして、細かかったのです。「15マルク以上はダメだ！」なんて言って。私たちは、靴は、ほとんどクリスマス後に買ってもらいました。本当に、クリスマス後に値段が下がったからです。

私たちが子供の頃は、ただ大人が政治について話しているのを聞いていただけでしたが、大きくなってからは、私の家ではいつも政治について、話をしました。母は、ただ聞いているだけでしたが、台所の仕事をしていない時には、その場にはいました。でも議論に積極的に参加したというわけではありません。彼女は党员で、党の婦人部の夜の集会に行っていました。父も、彼女を党の大会などに同伴していました。だから、彼女は、自分がどこに属するのかは知っていたのです。

私は、よく父と熱くなって議論をしました。「つまり、お前もドイツ民族主義者の仲間になったのだな！」と罵倒されたりして、そうなると彼は、もちろん鉄のようでした。彼は、よく怒りました。私は「ちがうわ。きちんと聞いてくれなきゃあ、困るわ。左に行くか右に行くかしかないのね。いろいろな面を見て、そこで良いと思うことを見ようとしているのよ」と私が言ったりしました。

[H氏]

私の父は、私たちを殴った事はありません。両親は子供たちを殴ったりしませんでした。私の家では、母はお金のことについては、話しませんでした。しかし、たとえば、「もうお金がないわ！ もうお金がないわ！」などと母は

言いましたが、それは、私たちが失業していた時代で、生活保護もうけていましたし、ただ「ぜんぜんお金がないわ」「お前は、もっと食費を出してくれないとだめだよ」と母が言い、それで終わりです。特別に話はしませんでした。私は、いつも余分に食費を渡す人間でした。父はそうではなかったのです。昔は、どこの家でもそういう慣習でした。私は徒弟奉公で稼いだ3マルクのうち、2マルクを出さなければならなかったのです。

私の父は、左翼でしたが、とても寡黙だったので、私たちは家で政治について話すことなどはありませんでした。彼は、自分がどこに属すのか知ってはいました。私たちは、当然のことながら、いつも『フォルクスフロイント』を読んでいました。しかし、それ以外には、何も話しませんでした。私も兄たちもです。

もちろん、私の両親は、左翼の考え方をしていました。もちろん両親は左翼でしたとも。そうでなければ、14才の子供の労働組合加入とか、そんな行動を許すわけがありません。14才や15才では、自分が何をやって、どんな位置にいるのかは分からないのですからね。父からは、何らかの形でいつも刺激されていました。第一次世界大戦中に経験したことなどもそうです。というのも、戦争が始まった時には、私はまだ7才か8才だったのですが、戦争中、私はかなりのことを父と一緒に体験しました。その経験が私の頭からはなれないのです。

8. 結婚

[H夫人]

私が夫と知り合った時は、彼は失業中でした。私達は、ライヒスバンナー *Reichsbanner* (ドイツ国旗党：ワイマル共和制擁護を目的に1924年設立、1933年ナチによって解散)の主催する、あるパーティで知り合ったのです。私は、宝くじで夫を獲得したのです。そのパーティの場所で、私は、宝くじを売り歩いたのですが、そこで夫と一緒にダンスをして、知り合ったのです。

夫と知り合う前に、私には好きになった男の人がいて、その人の子供を生んでいました。私は、そのことを夫に話しましたが、同じように夫も自分の性的な関係もつつみ隠さず、私に話してくれました。夫は、青年運動の中での自由さによって、そういう風に、開けっぴろげになったのです。

私の母は、私と夫が、またそんな関係にならないように、二人一緒の時はいつも監視していました。それなのに、私たちが婚約したら、もうまったく監視しなくなったのです。ある時、一緒にパーティに行った帰り、夫が私を家まで送ってきました。夫はアルコールを飲んでいたので、「家に帰らずに、ここにいなさい」と私は言いました。それで私は夫を居間に連れていきました。彼はアルコールで完全に酔っていたのです。私は、やっとの思いで、彼を階段の上まで引っ張り上げて、服を脱がせ、ソファーに寝かせました。寝室にいる私の両親とはといえば、母は、物音を聞いて、「あら、あんた、そこで何をしているの?」と訊きました。私は、「ええ、エーリッヒを連れてきたのよ。お酒を飲んで、まったく酔っぱらってしまったから、カスターニエン・アレーの家まで歩いて行けないのよ。彼は、私を家に送ってきてくれたけれど、家に帰るまでに転んだり、何か起こってしまうといけないから。」と答えました。私が思うに、母は、その夜は一分間も心安らかでいられなかったでしょう。私は、自分の部屋で寝たというのに、多分、私が夫と何かするだろうと考えたのでしょうか。つまり、母は、何度も何度も起きたのです。これは、1932年に私と夫が知り合った時のことで、夫が25才の時でした。

私たちは、1932年の聖霊降臨祭の祝日に、ハインベルグ *Hainberge* へ行ったのですよ。ヴォールデンベルク *Wohldenberg* の城跡の城壁の上に坐って、そこで夫は、私に指輪をはめてくれたのです。指輪のことは、その前に言ってくれてはいたのですが、突然のことでした。こうして、聖霊降臨祭の月曜日には婚約して家に帰ってきたのです。

私の父は、33年に逮捕されました。33年から34年にかけて家にいなかった

たのです。そして35年に再び逮捕されたのです。私たちは34年か35年には、もう所帯を持つことができたはずなのです。でも、いつも父がいなかったのです。私はとても父が好きでしたし、夫も、もちろん、父が好きでした。だから、私たちは、父なしには、絶対に結婚式をしたくありませんでした。そうこうするうち、36年に、私たちは、やっと夫が準備した住居に入居しました。彼は住居を自分の手で修繕したりして、住めるようにしたのです。

9. 性・避妊・妊娠中絶

〈性〉

[H夫人]

私は、17才の時に、ある男の人と知り合いました。その時、これは大恋愛だと思ったものです。それまで、私は、とても活発なタイプで、内面的な葛藤などはありませんでした。だれか男の子を感じがよいと思ったりしただけでした。私は、ある合唱団にいました。少年合唱団です。男の子たちが私の前に坐り、私はいつも少年合唱団で、団員が欠員になったときなどに合唱を助けたのです。その合唱団は、労働者の合唱団ではなく、ブルジョワのグループに属すもので、一流の合唱団でした。良い指導を受けていて、良い声の合唱団だと父が認めてくれたので、労働者の合唱団でもないのに、一緒に合唱していたのです。私は、いつも男の子たちと一緒にいたものですが、恋の火花が散ったことはありませんでした。でも、そこで、私はある男の人と知り合ったのです。彼は、事態がそこまで来ってしまうほどまでに、私の頭を熱くさせたのです。事態がそこまできてしまい、私たちは婚約しました。でもそれは私の側からだけの婚約だったのです。私の側からは、それによって関係を確固とさせたかったのですが、父は距離を取って、婚約の場にはおりませんでした。婚約は、1929年でしたが、その後、解消されました。婚約の解消は、男の子が産まれた1年半後だったと思いますが、もうよくは覚えていません。私たちは同じ土地に住んではいなかったのです。つまり、彼は、後にハ

ルツブルク *Harzburg* に住んでいました。そのことは、私にとってまったくの失策でした。その男は、とても外見がよく、教育もあり等々、また職業は商人で、売場主任でした。しかし、横領事件を起こしてしまったのです。それで、私は彼とまだ一緒にやっていく意味はないと考えたのです。彼は、1907年生まれ私の夫と同じ年でしたが、戦死したので、もう彼とは何のつながりもありません。もちろん、若い女の子が初めて恋をして、この男と一生暮らすために出会ったのだと思ったわけですから、私は、彼と結婚するつもりでした。いつも結婚に踏み切った両親や他の人びとの結びつきを目の前に見ていましたから、深く考えもしなかったのです。単純に、子供ができれば、結婚するものだと考えたのです。結婚前に子供ができれば、不幸です。私の両親がどのように考えたかという、その男が社会主義の仲間の出身ではなかった、父は、もともとその結婚話には反対でした。それが、いつも私に対する警告でした。父は彼をいたく拒絶しました。もちろん、それは私に大きな影響を与えました。

そうこうするうちに、子供ができて、「それで、私にこどもが生まれるのよ」と両親に言った時、特に父にとっては、世界がひっくり返るような驚きでした。彼は、それを理解できませんでした。そして、父は、何度も「お前はいつもとてもたくさんの若い男の子たちと一緒にいたじゃないか。彼らがお前にちょっとでもさわろうとしたら、お前はいつも痲癩を起こしていたじゃないか。彼らがちょっとお前を抱きしめようとしただけでも」と言ったものです。父は、家の鍵を閉めようとする時に、私を若い男の子が家に送ってきて、私を抱きしめようとしたりするのを見ていたのです。そんな時、私には、なぜか、何も言いませんでした。実際に、私が一発お見舞いした男がいたのです。そんなことは、今だったら、何とも思わないようなことだったのですけれどね。

私は、当時、両親との間に起こったことを、まだ覚えています。両親は「良く聞きなさい。お前は、あの男の母親のところへ行って子供を産めばよいの

だ。でも、私たちの家では産ませないよ」と言いました。それが私の両親の考え方でした。両親は追い出すと脅したわけです。だから、私も家を出て、ハルツブルクにいた、当時の姑のところへ行きました。でも1週間後に、泣きながら、家に戻ってきてしまいました。子供はブラウンシュヴァイクで生まれました。ハルツブルクでの生活は、まだ若い娘の私にとって初めての経験でした。そこには、5人の子供がいたのです。私は、彼らの居場所をとっているという気持ちになったのです。それに結婚していても嫌なのに、誰かに大きなお腹を見られるのが怖くて、いじけてもいました。まったく、ばかげた考えを持っていたものです。当時、私は、子供、つまり最初の息子が生まれるのを恥づかしいと思ったわけではありません。私は子供を中絶しようなどと、ちょっとした間でも、思ったことはありませんでした。その反対に、私はとても嬉しかったのです。だから、幸せな瞬間に子供を宿し、またその子を幸せに生んだと言いたいです。当時は、彼との付き合いには先がないと、100パーセントの確信がもてませんでした。私の理性は、いい夫婦にはなれないと言ったのですが、にもかかわらず、私の感情は、その男に惹かれていたのです。彼は、いいことばかり言って、本当に私を掴まえていたのです。

ハルツブルクから戻って、私はシュロス通りの両親の家に住みました。妊娠期間中の最後の3カ月間、家では、ドアの一步手前に坐っていることも許されませんでした。家に閉じこめられていたのです。つまり、父も母も私が公共の場に出ることを嫌ったのです。父は、しかも『フォルクスフロイント』の同僚たちに、方便の嘘をつきました。同僚が「お前の娘を長いこと見ていないが、どうしたのだ」と尋ねたので、父は「ああ、娘はデュッセルドルフにいる私の妹のところにいるよ。」と答えたのです。それで、子供を生んで、また家に戻っていた時に、外へ切手を買いにいたら、父の同僚に出会って、「ああ、君をずっと長いこと見なかったけれど、デュッセルドルフにいたそうだね」と言うので、私はとても生意気に「いいえ、私はこの3カ月間、ずっとここにいました。子供が生まれるのを待っていたのですが、その子も数週間前に生まれました」と言いました。

そこで、私は両親に、「どうして嘘を言うの?」と大きく出て、言ったのです。どうして本当のことを言えないのでしょうか。いつかは知られてしまうのに、と私は思ったのです。私に、父の同僚たちは、父の上司やその妻でさえもが、ちなみに彼らは私のところを訪ねてきてくれたのですが、「なぜ、君の両親が君を家から追い出したのか、ぜったいに理解できなかった」と言いました。父の上司の奥さんや母親は、子供をそのように扱うということを、理解することはできなかったのです。でも、私の子供が生まれた日の父ほどに、喜びで頭がおかしくなっていた人はいなかったでしょう。子供が誕生した最初の日から、私の両親は、頭が狂いそうなほど幸福そうでした。

[H氏]

私たちの青年運動では、性について話すことは、タブーではありませんでした。私たちは、仲間うちでは、何でも話していました。当時は、男の子たちが少女と知り合うと、誰からも見られないような場所へ行って、会ったのです。道の上で抱き合って、キスをするような今の若い人とはちがったのです。そんなことは、暗いところでしたものです。その方が、ずっと素敵ですよ。昔は、そんなことは恥ずべき事だったのです。それに若い女の子が、未婚で子供を生むなんて事は、もっと恥ずべき事でした。そんなことをしたら、すぐに口から口へと噂されました。たとえば、「あの娘は、もう役に立たない。あの娘は男にやらせたんだよ。もうあの娘は、ダメだ」「尻軽な女の子だ」などと言われました。

「あの娘は尻軽だ」とね。もちろん、労働者の若者たちの間でもそうでしたとも。私たちは、ブルジョワ階級の連中とは付き合いはありませんでした。私たちは、労働者の子どもたちとしか付き合いはありませんでした。私が妻と知り合った時も、そうでしたが、付き合いはじめて8日後か14日後に、「お前、あの娘には子供がいるんだぜ」と本当にはっきりと言われました。でも、妻は、もう私にそのことを話していたのですよ。ええ、彼女は、私に話してくれていたのですよ。だから、彼女は、子供がいることを私に隠していたと

いうことはありませんでした。

知り合った時に、彼女には、もう子供がいたのです。それに経済的な問題もありました。子供のいる女性と結婚するという事は、金の問題でもあるのです。

男が結婚するとしたら、それは負担になりますよ。個人的な問題は別として、他の男の子供の父親になれるのだろうか、という感情の問題もあります。他人の子供の母親よりは、父親である方が楽だろうとは思いますが。しかし、それが、誰にでも当てはまるとは思いません。子供にぜんぜん気付かせないとか、知られないなどということは、どこでも可能というわけではありません。誰でもがその子供を他の子供たちと同じように扱い、区別しないというわけではないのです。

<避妊>

[H夫人]

当時、避妊具はありました。コンドームとか、そんなようなものがありました。私の母は、孤児でした。母もきっと、まったく何もわかってはいなかったのです。母は、父と25才の時に結婚したのですが、その前はだれとも関係はもっていませんでした。彼女は、工場で働く叔母さんだか親戚のために弁当を持って行った時に、まったく偶然に、父と知り合ったのです。彼女には、その他には、ぜんぜん、他の男の人たちと知り合う機会がなかったのです。私はドクター・ルーベ *Dr. Lube* は、よく知っていましたが、ドクター・ルーベが避妊法普及のための講演をしていたのは、ずっと後のことだと思います。私の両親も避妊具は使っていなかったと保証できます。母は処女のまま、結婚したのだと確信しています。私は、避妊具があるということは知っていましたが、たとえばコンドームのことは、17才か18才の時には知っていませんでした。

〔H氏〕

両親は絶対に避妊具を使っていなかったと思います。私の母も避妊具は使っていなかったと思います。これは保証できます。

私たちの世代は、両親がキスをするところなど見たことがありません。少なくとも、私は両親がキスをするのを見たことがありません。そういうことは、みな子供達のいないところでされたので、昔は、誰もそういった場面を見てはいけなかったのです。妻の両親の場合も同様です。私たちの両親は、他の方法を知らなかったのです。そういうことは、みんな知られないようにしてされたのです。両親が好きあっている風な様子などを子供が見てはいけなかったのです。今は、まったく逆ですけれどね。私たちの家でも、私たちがキスするのを子供たちは見ていましたが、当時はそうではなかったのです。

私は、避妊具のことは、ずっと後になってから知るようになりました。避妊法普及のための講演は聴いたことがありませんでした。実際には、若者同士で、こっそりと、静かに小さな声で、「これだ、あそこにコンドームがあるから、買ってこいよ」と言われたものです。本当に恥ずかしがりながら、買いに走ったものです。今とはちがったのです。今の人たちは、まったく自由にあっけらかんとして「私たちはピルを買いに行くわ」と薬局に行きますけれどね。

私の仲間たちは、泳ぎに行っても、いつも水着無しでした。だからといって、だれもそれを変だとも思わなかったのです。女の子と関係することもありますでした。エラ・ヴァールディック *Ella Vahldieck* も一緒でした。男の子と女の子と一緒に泳ぎにいったのです。私たちは水泳パンツもはかずに泳いでいたけれど、何も起こりませんでした。私たちは、ここの小さな池で泳ぎました。クロイツ池 *Kreuzteich* とか、森の中の池で泳いだのです。オストゼー *Ostsee* でも泳ぎました。

私は、裸のまま泳いだりしていたのですが、そのせいで女性と関係しようという考えに至らなかったのです。だから、本当のことなのですが、私は

21 才になって、まだ女性の経験がありませんでした。それは多分、青年運動でとても自由に生きていたせいかもしれません。

〈妊娠中絶〉

[H夫人]

中絶したからといって、処罰はするべきではありません。私自身、結婚前に夫と付き合っていた時に、中絶をしたことがあります。1932 年頃のことです。夫の友人を通じて、昔、看護婦をしていたという「賢い女性」に、1 ペニヒのお礼もなしにです。

[H氏]

近所で起こった中絶などについては、もちろん、聞こえてきました。たとえば、新聞記事にもなりました。しかし、中絶したからといって、処罰はするべきではありません。

どのような場合でも、私は希望する女性には、煩雑な手続きなしに、いずれにしても、中絶手術を受けさせるべきだと思います。当時は、「誰がどうした、誰がどうした」などと、こっそり話されたものです。

昔は中絶をする家庭医なんていませんでした。貧しい人たちには医者はいなかったので、子供を作らなきゃあならなかったということです。だから子だくさんだったのです。

10. 職業生活

[H氏]

私は、13 才半で徒弟修業を始めました。1921 年から 4 年間、徒弟修業をして、1925 年にそれを終えたのです。徒弟試験用に安楽椅子を作って、2 等賞を貰いました。職人試験合格証といっしょにその賞状をとってあります。徒弟修業を終えた後はまだ少し、ヴァツラヴィック *Watzlawik* という名の親方

の元で働き、その後、よそで働きました。ヴァツラヴィック社は、昔は、ブライテ通り *Breite Straße* にあって、オットー・ヴァツラヴィック *Otto Watzlawik* という名前の会社でした。今はパーペンシュティーク *Papenstieg* といっていますが、当時のランガーフェルト *Langerfeld* の隣の通りが、ブライテ通りです。そこにヴァツラヴィック社があったのです。小さな会社でしたが、作った品物を展示しておく店がありました。この地域では一流の手工業の小企業でした。つまり、とても上質な品物をつくる会社で、お得意の客がいたものです。当時、お城用の品物をつくっていて、たとえば上等な金欄張りの椅子や安楽椅子などです。その他にも壁貼り用の絹生地等も、ヴァツラヴィック社はつくっていました。私は、壁紙貼りの仕事も一緒にしていました。

私は、25年に徒弟修業を終えてから、椅子張り職人として、まず6週間働いて、その後にもた8週間というように働いていました。椅子張りは壁紙貼り職人の仕事なのです。内装職人も兼ねていますが、その仕事は、まあカーテンなどの取り付けなどです。修業を終えて以来、何度も失業していました。この職業は、いつも数週間単位の仕事なのです。切れ切れの仕事しかない職業でした。いつも、ここで数週間、次もまた数週間、またあちらで数週間というようにです。そして、何とか日々をやり過ごせるかどうかという仕事量で、最後はどうにもできなくなるという風でした。その挙げ句に、その数年後には、34年までのほぼ4年間、失業していました。1月29日まで仕事なかったのです。私は、34年に、再び働きはじめました。

ヒットラーの時代には、私たちは仕事道具もなしに、アオトバーン（：高速道路）作りの仕事をしました。その後は、私はいつも仕事についていたが、本当に、1925年から34年の間は、困った時代でした。29年は、大失業の年でした。みんなが困ったのです。ほとんど誰もがこの難から逃れることはできなかったのです。

11. 宗教・政党・労働組合・帰属意識

〈宗教〉

[H夫人]

私は学校で宗教について知りました。下級の学年時には、いつも宗教の授業を受けなければなりませんでしたが。そして、誰もそれをしようとしなかったもので、私はいつもクリスマスの詩を暗唱しなければなりませんでしたが。私の両親の家で、ある時、父と話し合いをしました。生物学とか、世界がどのようにしてできたのか、つまり地球とか宇宙とか、そんなことなどを考えてみたり、それからキリストは本当に存在していたのか、どうして聖書を書いたのだらうなどということ話し合ったのです。父とのこの会話のことは、今でも覚えています。両親の古い知り合いのマンティエ *Mantje* 嬢が同席していて、私たちはとても素晴らしい議論をしたのです。つまり、とても実りの多い会話だったのです。そういったテーマは家庭で話されることだと父は言っていました。

それで私は、私の先生に「父と話し合い、私も堅信礼を受けないし、教会から脱会するという意見に達しました」と伝えました。先生は私がそう言った時、まったく驚きました。それでも、私はそうしたのです。それで、裁判所に行きました。付き添いもなしに、まったく一人っきりです。私は14才でした。

[H氏]

1921年に「生活科」の授業が始まり、私はこの授業をヴァルター・ヨルン *Walter Jorns* という名前の先生から受けました。週に1時間の授業でした。牧師のところへ行く代わりに、私たちはこの授業を受けに行ったのです。週に1時間でした。牧師の所へ行くよりもずっと多くのことを学びました。

私は、もし教会から脱会するなら、確信があるからであって、もし、留まるなら、それは確信があるから留まるという立場です。私は、教会の税金の

ために脱会したのではなく、宗教にたいする否定的な確信があったから脱会したのです。それは、大きな違いです。

〈政党〉

[H夫人]

私は、SPDには入っておりませんが、いつも夫と一緒にいろいろな活動をしていました。若い頃は、職員労働組合中央同盟組合と、自由体操協会という、はっきりとした労働者の協会には入っていたのですが、政治的には組織されていませんでした。入党はしていませんでしたし、「ファルケン」*Falken*の会員でもありませんでした。後になって、やっと政治的に成長しましたが、当時は、まだ成長期だったのです。スポーツが私にとっては、ずっと大事だったのです。いずれにしても、私はいつもSAJの人たちと一緒に行動していたのです。彼らと一緒に遠足に行ったり、踊ったりしました。SAJの事務所が同じ建物の中にあっただのですから、当然、そうなるのです。つまり、はっきりとした拘束力をもつような関係なしに、私は、どこにでも首を突っ込んでいたのです。しかも私は、興味をひくようなものなら、集会にも一緒に行きました。私の母も黨員でした。父も母もSPDに入党していました。もちろん、父の方が熱心な活動家でした。父は、徒弟修業の時代に兄弟子の職人に勧められて労働組合に入り、労働組合運動を通してSPDに入党したのです。つまり、彼は、いつもSPDのために闘いつづけたと言えるでしょう。

私の父は、ブラウンシュヴァイクでは、ドクター・ヤスパー*Dr. Jasper*、シュタインプレッヒャー*Steinbrecher*を尊敬していました。ヤスパーは、後に首相になりましたし、シュタインプレッヒャーも、後に大臣になりました。それに、グスタフ・キルヒナー*Gustav Kirchner*ですが、彼はブラウンシュヴァイクの労働者福祉部*Arbeiterwohlfahrt*の労働者書記でしたが、父は、よく彼のことを話していました。ヤスパーは、私たちの『フォルクスフロイント』の建物の中に坐っていました。『フォルクスフロイント』編集長のオットー・ティーレマン*Otto Thielemann*は、私にとっては特別な人物です。彼の戦争

中の話を書いた小説も読みました。

私の父は、ラサール *Lassalle*、ベーベル *Bebel*、マルクス *Marx* とエンゲルス *Engels* をとても尊敬していて、いつも、この4人のことを話していました。もちろん、個人的には彼らとは知り合いではありませんでした。父にとっては、この4人の有名な社会主義者は、偉人でした。

ワルター・シュミット *Walter Schmidt* は、本当に、労働者階級出身で、あれだけになった人物です。彼の父親は早くに戦死し、彼は父親なしに成長しました。彼の家族は、エルシュレーガーン *Ölschägern* のところの、ヴュステヴォルト *Wüsteworth* に住んでいました。エルシュレーガーンは、ランゲダム通り *Lange-dammstraße* への接合点でした。そこに、またさらに小さな道があります。ここが、ヴュステヴォルトです。今は、そこにホルテン(デパート) *Horten* が建っています。ワルター・シュミットは、ここで生まれたのです。ワルターの運命は、苛酷でした。彼の母は、二人の息子を育て上げ、そして、彼は勤勉に働いたのです。その結果、彼はエンジニアにまでなりました。彼が昔は何の職業だったのかは知りませんが、修理工か何かから昇りつめて、連邦議会の議員にまでなったのです。最初は普通の労働者から始めて、ずっと、勉強し続けたのです。それが大事なのです。それこそが、1930年以前、しかも第一次世界大戦前にあった、昔の、労働者教育協会の活動の成果なのです。私は父から聞いて知っているのですが、彼もこの協会に属していたのです。つまり、カール・マルクスが言っているように、「知は力なり」です。父からこの言葉を、しばしば聞かされたものです。私は機会ある毎に、父から本をプレゼントされました。その中には、私がまったく理解できないものもありましたけれどね。本をくれるときは、いつも「お前は、この本を読まなければいけない。知識は力だ」と父は言ったものです。このモットーから、いかに父が、本を読んで知識を身に着けることに価値をおいていたかわかります。

メルゲスの息子も『フォルクスフロイント』で活字植字工として働いていました。アウグスト・メルゲスは、アルテヴィークリンク *Altewiegring* に住

んでいました。私たちは、新聞を届けに行っていました。33年以降に『ブリック・イン・ディ・ヴェルト』‘*Blick in die Welt*’という、外国の新聞記事を掲載した、非合法の小冊子があったのですが、私たちは、この小冊子を旧社民党員に届けていたのです。

[H氏]

私はSAJ(社会主義労働者青年)に所属してはいませんでした。USPD(独立社民党)に所属していました。党と青年組織にも所属していました。USPDには21年に入り、解散まで所属していました。解散になったのは22年か23年だったと思います。忠実なグループだったのですよ。私はまだ若かったから、仲間と一緒に行動しました。14才か15才の若者だから、まだきちっとした政治的な路線についての考えなど持ち合わせていませんでした。何が起きているのかなど知りもせず、ただ、我々是一緒だ、我々是一緒だといった意識で動いていたようなものです。

私は、その後、ライヒスバンナーに入りました。旅職人の遍歴から戻った時ですから、1929年に入ったのです。これも終わりまで一緒に活動しました。

SPDへの入党は、戦後の45年です。

私の父がSPDに入党しなかったのは、面倒くさがりだったからです。彼は左翼だったし、私の家の者全員も左翼ではあったけれど、誰も彼に対しては、入党するようにと説得はできませんでしたが、私がラジカルな路線にいた時にも、彼は気にはしませんでした。私達を自由にさせてくれました。もちろん、私は、党費は、自分で払っていました。私は修業中、週に3マルクもらっていました。家に入れる食費に2マルクですから、1マルク残ります。週に1マルクですから、月に4マルクです。このなかから私が所属しているすべての組織の会費を工面しなければなりません。硬貨1枚分の会費ですが、月に50ペニヒでした。労働組合費も、見習いの私達は50ペニヒ払いました。だから、4マルクのうち、1マルクは党費と組合費に出ていきました。

父は、なぜかシュタインプレッヒャーと個人的な知り合いでした。特に彼

のことは良く知っていたのです。彼は、ラーベ通り *Raabestraße* に住んでいました。私は、彼とは知り合いではありませんでした。父がヤスパーと個人的な知り合いだったかどうかは知りませんが、キルヒナーは良く知っていました。祖母がベットの下にお金を貯めていたのですが、そのお金のことで、法的なアドバイスを受けるために、父はキルヒナーの事務所へ行きました。父は、印刷工として働いていた時代に、シュタインプレッシャーと知り合っていたのです。彼は活字組工だったのです。

私は、お城の公爵のことなどは、ぜんぜん、尊敬してはいませんでしたが、私は公爵が結婚した時のことは覚えています。1913年のことでしたが、学校で、手に小さな旗を持っていました。公爵を尊敬するだなんてことは、私の家では考えられません。

〈労働組合〉

[H夫人]

私は、1925年に見習いを始めた時に、職員労働組合中央同盟組合 ZdA に入りました。これも 1933年まででした。私の場合は、労働組合への加入は避けることができなかつたのです。私は、職員労働組合中央同盟組合を通じて『ノイ・ドイッチュラント』‘*Neu Deutschland*’の働き口を得たのです。だから、労働組合に入るのは当然のことで、私にとっては、義務だったと言えます。私の父はそのきっかけを与えてくれました。私たちが、今、社会主義を信奉しているのは、彼のおかげです。私の場合は、父の影響が強いと言えます。

[H氏]

私は、1921年に、当時の鞍製造職人・壁紙貼り職人同盟 *Sattler-und Tapezierer-Verband* に入りました。私は、信念から労働組合に入りました。父も労働組合に入ってはいましたが、私の場合、父に影響されたというよりは、私の内部から起こった信念によるものでした。私は、しかも私の兄弟子の職人を労働組合に引っ張り込んだのです。労働組合への加入は、自分で考

えたことなのです。

当時、私たちは4月に学校を出て、13才でした。6月になってやっと14才になったのです。13才の子供として3カ月働いたわけです。それで、どのようにして私が運動にたどり着いたかということ、とても単純なのです。つまり、私は新教の受堅資格者のための教理授業を受けていました。その授業中に、牧師と議論したのですが、それが彼の気に入らなかったのです。それで、彼が、「お前には堅信礼を受けさせない」と言いました。つまり、彼の言葉通りに言うと、「お前の家族の者たちは、神を信じていない」と言ったのです。それで、私は聖歌の本をしまい、教室を出てきました。この経験は、一人の人間の内面に大きな影響を与えました。というのも、私の家族は新教なのですが、私の二人の兄たちと姉は、クリスマスにはじめて受堅資格者のための教理授業を受けに行けばよかったのです。戦争だったからです。私の場合は、もう授業が終わっていたので、復活祭に授業が始まりました。私たちは知らなかったのですが、私は、9カ月も遅れていたのです。それを牧師は母に言いました。しかし、彼女は教会へよく行く人ではなかったで、そのことをはっきりと言ったのです。そうすると牧師は母を怒鳴りつけました。それを根に持って牧師は私に八つ当たりしたということです。そんなことがあったので、私は、青年式に参加しました。妻と同様、私はキリスト教の教育を受けていません。それで、青年式の際に青年部に誘われたのです。当時は、ここには **USPD** (独立社民党) しかありませんでした。**SPD** は強くなかったのです。当時は **USPD** でした。私は、社会主義プロレタリア青年同盟 **SPJ**、鞍製造職人・壁紙貼り職人同盟、フライエ・フォルクスビューネ青年部、ライヒスバンナーに入っていました。他の青年部グループの仲間たちとも、いつも一緒にいろいろな活動をしました。仲間というのは、自然愛好家協会とか、社会主義労働青年 **SAJ** などの人々です。**USPD** がもう党でなくなっていたので、私たちは、一緒に留まろうとしたのです。そういうわけで、そういったすべてのグループを好ましく感じていたのです。ちょうど **USPD** の解散後でしたからね。私たちは、いわば残党でした。なぜ私が **SAJ** に入らなかった

のか、その理由は私自身にもわかりません。私は、これらの組織には知り合いを通じて入りました。父は、工場労働者同盟という労働組合以外には、他のどこの組織にも入っていませんでした。父は、タールをつくる小さな工場で働いていました。その時はもう、彼は工場労働者同盟に入っていました。労働組合運動には賛成でしたが、党には入っていませんでした。それに私の兄弟たちも、どの党にも入っていません。私が唯一、あの牧師のおかげで、入党するようになったのです。だから、若い時にどんな環境にいるかによって、人生が左右されます。

ライヒスバンナーの中には、さらにもうひとつ保護組織がありました。シューホ *Schufo* という言葉を聞いたことがありますか？ ライヒスバンナーは、1番から12番までの12のグループに分けられていました。私は4番目のグループに属していました。これがさらに4つの百人隊へとさらに分けられたのです。4つの百人隊のメンバーは、ライヒスバンナーの活動家です。これは、ナチ突撃隊 **SA** に対する本格的な抵抗組織でした。この百人隊は、かなり強くて活動的でした。私は、ライヒスバンナーの、この4つの百人隊の中にいたのです。この4つの百人隊の中から、各々3人が特別な任務のために選ばれました。守備部隊 *Schutzformation* として、街頭戦や集会の守備をしたのです。

当時は、ナチ突撃隊から自分たちを守らなければなりません。そのために、この守備部隊がつくられたのです。4隊がブラウンシュヴァイクにありました。その中から各々3人ですから、12人がブラウンシュヴァイクで特別な任務に選ばれたわけです。この中に私が入っていました。このために、私には十分な仕事がありました。

だから、この時代からワルター・シュミットを知っているのです。ちなみに、ワルター・シュミットは、私たちの家の近くに住んでいました。彼はエルシュラーガーンに住んでいたのです。ワルター・シュミットと私はライヒスバンナーで知り合ったのですが、この3人のことは、ワルター・シュミットでさえも知りません。この12人は、どこかで何かがあると出て行きました。私た

ちは、十分に忙しかったのです。殴り合いとかがあると、それをやめさせて、保護したものです。それは、特別な仕事でした。この仕事を一緒にした仲間たちは、もう誰も生きていません。私だけが残っています。SA と SS に対するライヒスバンナーの守備隊でした。

〈帰属意識〉

[H夫人]

私は、1930年代は、中産階級 *Mittelstand* に属していました。私は両親の家でとても豊かに暮らしました。それに、私の母は、労働者階級とはまったく違う境遇で育ちました。ワルター・シュミットなら、自分を労働者階級に属していると言うでしょう。私も労働者階級 *Arbeiterklasse* に属しています。でも、低く評価されるような概念というものがあります。労働者だからといって、低く評価されるべきではありません。でも世の中では、部分的には低く見られます。私たちは、そんなに良く評価されないのです。

[H氏]

私は、労働者階級 *Arbeiterstand* に属していました。ランゲ通りとカスターニエン・アレーを一緒にしてはいけないけれど、それにもかかわらず、私たちは労働者でした。私は、自分の生活費を実際に手を使う仕事で稼ぎ出さなければならなかったからです。重労働で、かつ財産をつくれるような仕事ではありません。だから、私は自分が労働者階級に属していると言うのです。

まったく何も蓄えませんでした。貯蓄などはまったく無しでした。私は、その日暮らしをしていたのです。だから、私は労働者なのです。私が11才で、1918年のことでした。戦争は終わりました。その後、1919年にメルカーの部隊 *Mercker-Truppen* がここに進駐してきました。その時にはじめて、私は労働者とブルジョワの違いに気が付いたのです。この近所の食料品屋のシッファー *Schiffer* の店からは、私たちは何も買うことができませんでした。彼の店には何もなかったからです。しかし、メルカーの部隊が進駐してきたら、

彼は、まだ店にあつた物を何から何まで部隊に持っていったのです。それ以来、私は彼の店からはもう何も買いません。私は、そこで、私たちが違う階級に属していると気がついたので。

〈組織の役職等〉

[H夫人]

私は、いつもかなり小さな会社で働いていましたから、経営協議会などは、通常、ありませんでした。加入していた協会でも何かの役職についたことはありません。

子供の時に、父に頼まれて、党費を集めて回った事がありますが、それは自分の役職としてではありません。私は、正式の会員でないのに、至る所に顔を出していましたが、それは、お金が問題だったのですよ。つまり、会費を払うのが大変だったから、正式の会員になっていなかったのです。党費や会費は、大変重要な問題でした。私たちの多くが失業していたのですから、党費や会費については、注意しなければならなかったのです。

[H氏]

私は、経営協議会の委員などの役職についたことはありません。SPJの副会計係はしたことがあります。

12. 祝い事・余暇

〈祝い事〉

[H夫人]

私の両親の家では、クリスマスは特別でした。グリュウワイン(赤ワイン、ラム酒などをハーブで香りづけし、暖めた飲み物)のようなアルコールを飲みました。

誕生日は、今のように大きな意味はありませんでした。昇天日 *Himmel-*

fahrt には、いつも、両親といっしょに、遠足に出かけたものです。でも、宗教的な祭りとしての性格はありませんでした。だから、教会から脱会していました。5月1日のメーデーには、その日が労働者の祝日だった時代には、朝早くから森へ行きました。メーデーは、家族にとっても大事な日だったのです。多分、私たちは、直接、党の建物の中に住んでいましたから、他の人びとよりも、より重要に感じていたのでしょう。それに、父は、普通よりも闘争的でした。私たちは、カトリックではないので、キリスト受難の日や靈名の聖人の祝日は、まったく関係ありませんでした。党や労働組合の祭りやパーティで、楽しい催しがある時には、よく行きました。父は、それが労働者の世界であれば、私が催し物や記念集会などに参加して、社会へ出ることに、とても大きな価値をおいていましたから、父は、私をいっしょに連れて行きました。

[H氏]

私の家では、クリスマスは、いつも祝いました。大晦日も祝いました。私の家には、親戚中が集まってきました。そういう祝い事の時には、親戚中がまとまったのです。家中で、ひとつの住居からもう一つの住居へと、歌いながら歩いて移動するのです。私の誕生日には、母が忘れない限り、ケーキを焼いてくれました。

しかし、私の家では、メーデーは重要ではありませんでした。

<余暇>

[H夫人]

私の両親は時間があると、家庭農園 *Schrebergarten* に行っていました。時間があると、私たちと散歩に行きました。それにたとえば、ハルツ *Harz* の親戚の家にも連れていってくれました。毎年、一回は行ったものです。その他には、昔は、日曜日の午後、この近くのクヴェルマーの森 *Querumer Wald* に短い遠足をしたものです。それからブッフホルスト *Buchhorst* やグリュエーネ

ン・イエガー *Grünen Jäger* などへも遠足に行きました。

私自身は、少し大きくなると、居酒屋への出入りが、生活の一部になっていました。父は、それをよく思いませんでしたが、母も、私が若い娘なのにひとりで家を出ていくのを好みませんでした。だから、私が外出したい時は、女の子の友だちや母、あるいは私と一緒に出かけたい男の子たちと、芝居やダンスに行きました。でも男の子は、出かける前に家に来て、私と出かけてよいかどうかを訊かなければならなかったのです。両親が、外出する前に、若者の顔を見ておきたかったからです。たとえば、私の家には、ガウス学校 *Gaußschule* へ行っている男の子が数人いました。彼らは、「学校祭に行かない？」と私のところに来たものです。彼らは、女の子をひとり同伴しなければならなかったのです。男の子といっしょに出かけるといっても、それくらい他愛のないものでした。

私は、自由体操協会に所属していました。そこでは、体操もしました。器械体操もしました。私の父は、労働者スポーツ協会に入らなければいけない、他のスポーツ協会はだめだ、と言うような人だったのです。ほんの小さな少女の頃から、『フォルクスフロイント』の中庭で、SAJ の人たちと一緒に民族舞踊をおどっていました。でも、SAJ の会員ではありませんでした。これは、私の同僚の女の子を通じて、工芸学校の民族舞踊のサークルに入って、そこで踊っていたのですが、ほとんどが SAJ の会員だったのです。そのほかにも、夜、工芸学校で陶芸などをしました。

[H氏]

私の父は、いつもブロートヴェーク *Brodweg* の庭で過ごしていました。母は、何も趣味はありませんでした。母は、5人の子供を抱えて、いつも夜遅くまで仕事をしていましたから、趣味を楽しむ暇などはなかったのです。両親は、余暇を楽しむための余裕がなかったのです。昔、クヴェルマーの森は、「ここでは、家族が自分たちでコーヒーを淹れることができます」というので有名でした。つまり、コーヒーの粉やパンなど、いろいろな物を持参して、

10ペニヒ払って、お湯を入れたコーヒー・ポットを借りるのです。コーヒーには、本物の豆か代用の麦芽コーヒーを持っていったのです。私たちの子供の頃は、ほとんどが麦芽コーヒーでした。

私は、若者となった当時、禁酒主義者で、かつ禁煙主義者だったので、居酒屋などへは行きませんでした。昔は、今とはぜんぜん違って、党地区支部やライヒスバンナーは楽しい催し物をしたものです。ブリュニングス・ザール *Brünnings Saal*, コンツェルトハウス *Konzerthaus*, ホーフイエーガー *Hoffjäger*, プリンツェン公園などのホールで楽しい催しがあったのです。ホーフイエーガーやコンツェルトハウスだと、とても多くの人が入ることができました。ホーフイエーガーは、本当にたくさんの人を収容できたのです。そこでみんながワルツを踊ると、それはもう見物でした。今では、そんなことはもうありません。

1933年にナチが実権を握ると、私たちはSPDもライヒスバンナーも、一時に活動できなくなってしまったのです。党の活動はできなくなってしまいました。私たちは、みな、どうしたらよいのか、分からなくなってしまったのです。私たちは、道で出会うと、「こんにちは、じゃあ又」とあいさつし合うだけで、もうまた注意をはらわなければならなかったのです。というのも、あの人もこの人もあちら側へと行ってしまったからです。楽しい催しはもうなくなってしまいました。だから、もちろん、毎晩、奥さんの元や恋人の元になまっすぐ戻るということになったわけです。その結果、みんな殻に閉じこもってしまったのです。そして、もう昔のように一緒に集まるということもなくなりました。もう、ホールも何もなくなってしまったのですから。ナチによって、みんな壊されてしまったのです。